

【研究ノート】

大学生の新聞購読意識についての一考察

—「メディアリテラシー」授業の独自アンケート結果を事例として—

大重 史朗

- 【1】 問題の所在
- 【2】 新聞購読についての学生意識の現状と考察
- 【3】 リテラシー力の現状について意識調査結果からの考察
- 【4】 メディアリテラシーの授業形態についての考察
- 【5】 本学部におけるメディアリテラシー授業の必要性と課題—まとめにかえて

【1】 問題の所在

本学現代教養学部発足と同時に、1年次の学生に対しては導入教育、必修科目として「メディアリテラシー」の授業が課せられている。授業は前期のみ15回で、現在のところ約100人の学生を2クラスに分割し、月曜日の2限と4限に実施している。そのうち5月から7月まで3か月間、学校の方針として日本経済新聞を学生宅に配達してもらい、購読させている。

授業方針としては、シラバスにおいて、「現代では、SNS（ソーシャル・ネットワークキング・サービス）を通じて自分の身の回りの状況や意見・主張を不特定多数の人に発信する機会が多い。その分、情報が氾濫する時代で、人々が情報に振り回される状況も発生している。たとえば、新聞や雑誌など既存のメディアからも、『公平中立』の社会的任務の陰で、偏った情報が流されかねない事態も問題化している。近い将来、社会人になる立場の大学生生活を送るにあたり、特に情報メディアの基本にある新聞の読み方を通じて、担当教員自身の新聞記者としての実務経験を活かし、メディアの立ち位

置や正確な情報を見極める力、社会の機能を確かめる力を講義やグループ学習などを通じて身につけていく。授業にあたっては日本経済新聞の記事を読みながら、どのような課題があるのかを、とくに新聞記者として実務経験がある講師とともに考察を進めていく」と示している。

さらに「学生が達成すべき行動目標」として「日本経済新聞を決められた期間内に積極的に熟読し、社会やメディアの問題点を考察する。そして、情報が氾濫する時代に「情報に溺れない」ための洞察力および「生きる力」を身に付けるためにはどうしたらよいかを自ら判断できるようになる」と方向性を示している。

そもそもメディアリテラシーとは、中橋によると、「メディアの意味特性を理解した上で、受け手として情報を読み解き、送り手として情報を表現・発信するとともに、メディアのあり方を考え、行動していくことができる能力のことである」と定義づけている¹。

そこで担当教員である筆者は毎回の授業において、当日の日本経済新聞朝刊を、「はさみとのり」、それに同社側から提供されたバインダーを授業道具の一式として持参させることから始めた。そして、授業の冒頭では必ず毎回、学生自身が印象に残ったニュースの切り抜きをさせ、記事の内容要約やニュースの背景、感想を考察する作業を学生に実体験させている。当初は新聞を読むことや記事を切り抜く作業自体に手間取る学生も少なくなかったが、当日の授業の「本題」に入る前の必須作業として毎回行ったところ、春semesterの後半にさしかかるころまでには、指示を出す前に作業をはじめた学生も少なからず見受けられるまでになった。

こうしたほぼ強制的に学生の自宅に配達し、新聞を読ませる授業を展開している内容は、筆者が参加している各種学術学会や研究者同士の研究会などで紹介しているが、全国の大学を見渡しても珍しく、単にメディアの領域だけにとどまらず、3年後の就職活動を見据えた社会人基礎力養成に向けても意義深いものではないかと推察している。

しかし、せっかく3か月間、新聞を購読しても、授業終了と同時に新聞を

読まなくなる学生が少なくないことが推察できる。新聞は「社会との接点」とされ、学生が新聞を読むことは、現代社会の問題点の把握や文章読解力・表現力・コミュニケーション力および、物事の理解力など総合的な社会人基礎力養成に役に立つものと思われる。

ただし、いわゆる「新聞離れ」、「活字離れ」の減少は、学生だけを責めるわけにはいかず、彼らの保護者の世代から新聞紙は、もはや見離されているのが現状である。昨今、新聞、とくに「新聞紙」を定期購読する家庭そのものが全国的に減っている現状は隠し切れない。日本新聞協会のデータによると、一般紙とスポーツ紙を合わせた購読部数は、2018年では3990万1576部であり、1世帯あたりの部数は0.70であり、1世帯につき1部すら購読していないことになる。同データによると2000年当時は、5370万8831部で1世帯あたり1.13あり、全国紙などの一般紙と地方紙または日本経済新聞といった1世帯で2部以上購読する家庭も少なくなかったものと思われる。10年前の2008年でさえも、5149万1409部で1世帯あたり0.98であり、多少の部数に陰りが見え始めたものの、現在ほどの低さではなかった²。

そこで筆者は2018年度と2019年度の春 semesterにおいて、大学生がどの程度新聞を読む習慣をもっているのか、興味のあるニュースは何か、なぜ新聞を読まないのか、などについて「問い」をたて、独自アンケートを試みた。その結果をもとに、現代の大学生の新聞購読に関する考え方について分析し、3年次以降の就職活動や社会人基礎力を身につけるための学習の手段として、中長期的に新聞を活用することができないのかについて、現時点で考察することとする。さらに、メディアリテラシーの力は昨今、「事実」とは何か、メディアが伝える内容がどこまで真実といえるのかについて、「ファクトチェック」という認識が必要とされている。

実際、筆者の授業においてもファクトチェックを題材とした書物をテキストの一つに指定しており、メディア、とくにインターネット上に流れ、あふれる情報を正確に認識できる力を養うことは要するに「生きる力」に相当するのではないかと考え、授業を進めるとともに、15回実施した授業の学生

自身の「メディアリテラシー」授業の「振り返り」も兼ねて、本論文で取り扱うようなデータ収集をアンケート方式で試みたものである³。

【2】新聞購読についての学生意識の現状と考察

まず、本論文では2018年度と2019年度の授業の最終週に実施した授業アンケートをもとに、分析を試みた⁴。アンケートを行う趣旨については、以下のような説明を調査用紙の冒頭に記すとともに、口頭においても伝えている。

《☆今年度前期の「メディアリテラシー」の授業では、「将来、社会人になる立場の大学生生活を始めるにあたり、特にマス・メディアの基本にある新聞の読み方を通じて、メディア情報の立ち位置や社会の機能を確かめる力をも身につけていく」ことを前提に授業を進めてきました。

☆15回の授業の振り返りも兼ねて、担当教員独自のアンケートを実施します。自分の意見・発言に責任をもってもらうため【実名の記名式】とします。授業などに批判的な答え方をしても、成績評価などで不利になることは一切ありませんので、感じたまま、ありのままを回答してください。

アンケート結果は、今後の授業の参考にするとともに、教育・研究活動に利用することがありますが、あくまでも統計上の数値のみで、個人名は公表しませんので安心してください。》

アンケートの質問は合計11問であり、そのうち9問があらかじめ用意した回答の番号を選択するもので、10問目が数値を記入するもの、11問目が意見の自由記述となっている。本論文では10問目までの分析をもとに考察を進める。

アンケートはおおよそ、①新聞購読の習慣や興味分野について、②メディアリテラシーについて、事実を確認する力を養う「ファクトチェック」についてどれだけ理解したか、そして、③授業の参加度やグループワークの是非、の3分野について問いをたてた。本項では①について考察を進めたい。

前項でも述べたが、全国的に新聞購読者数が減っている。その現実を反映した結果が如実に表れた結果が出された、3か月間に配達された新聞について、「週に1、2回購読した」が全体の半数近くで、次いで、2割程度の学生が週の半分程度購読していた（質問1）。一方で「ほとんど購読しなかった」という回答も2割弱見られた。授業が週に一度で、そのたびごとに「当日の朝刊を持参する」としていたため、それ以外の日は積極的に購読しない学生が少なくなかった。新聞購読については、授業の方針として大学側から手配して学生の自宅に配達する方式をとったにも関わらず、毎日配達される新聞に目を通さなかった学生が目立つことが特徴である。購読開始当初は、マンションなどの集合住宅に住んでおり、「1階のポストに取りに行くのを忘れた」と持参しない学生も数人みられたほどである。一戸建ての住宅であれば、玄関付近にポストがあるはずだが、そもそも「毎朝朝刊をポストに取りに行く」という習慣そのものが、日本人の生活から消滅しつつあるのではないかと考えられる。

また、新聞を手にとって読み始めたとしても、読む時間は半数近くが「10分以内」と回答し、次いで3割弱が「30分程度」であった（質問2）。実際読んでも、じっくり新聞記事や論説などの文章を、時間をかけて読む習慣が極めて少ないことがわかる。もちろん、「10分」でもある程度の分量は読めるので、8割程度が「目を通して」「活字に触れている」ことは評価できるとも考えられる。しかし、配達されているにもかかわらず、2割弱の学生が「ほとんど購読しなかった」と回答していることは、活字離れを象徴する数値ではなからうか。

一方、実際、購読した場合、どのような報道分野に興味があるかについては、「社会（事件や街ネタ、教育、福祉など）」と「スポーツ」がそれぞれ3割前後で、顕著であり、他の分野は少数であった（質問3）。学生はかつては「3面記事」などと呼ばれた社会面や趣味に通じる「スポーツ」欄にまず目が行くことがわかった。実際の授業でも「一押しニュース」の中にスポーツ欄から記事を選択する学生が少なからずみられたことは象徴的である。

ただ、大学側の配慮で配達される3か月の定期購読期間終了後は、「全く読みたくない」「あまり読みたくない」を合わせると4割以上にのぼることが注目できる（質問4）。確かに「時々読もうと思う」と「週に1、2回読もうと思う」をみると半数近くが積極的な購読を考えているが、ほぼ同じ割合で、読みたくない学生がいることの方が、授業が「その後」の行動につながるか否かに注目した場合は、課題を残した数字とも言える。

ただ、少しでも「読みたくない」という意識があると思われる学生に対し、その理由を尋ねたところ、「スマホやパソコンがあるから新聞を必要としない」という回答が半数で多数派を占めていた（質問5）。これは単に学生の「意欲」の問題以外にも、もはや新聞、とくに「新聞紙」は日本社会の中で必要とされていない、というインターネットを中心とした人々の生活パターンの変化や新聞文化の衰退も一因ではないかと考えられる。

[3] リテラシー力の現状について意識調査結果からの考察

メディアリテラシーの授業では、新聞購読を第一の柱としているが、そもそも「リテラシー」とは識字能力などを意味している。本授業においては、インターネットの情報が氾濫し、何が本当の「事実」や「真実」であり、何が「ニュース」で何が「広告・宣伝（PR）」なのか区別がつきにくい中で、前述したシラバスにも示したように、「メディアの立ち位置や正確な情報を見極める力、社会の機能を確かめる力」を養うことを目的としている。

本アンケート調査においても、授業を通して、世の中に溢れる情報の中から何が「事実」であり、「正しい情報」なのかを見抜く力をつけることは、社会人基礎力養成においても必要不可欠と考え、学生の意識を尋ねた。まず、授業で取り上げた「ファクトチェック」について「(物事の)真偽を見極めにくい場面があったか」という質問に対しては、「よくあった」、「たまにあった」を合わせると6割近い学生が回答している（質問7）。これは単に情報に関してではなく、例えば詐欺被害防止などの視点から、日々の生活において、今後は自分で見極める力が必要になってくることから、重要な課

題といえる。

実際、「物事や社会の出来事について、事実を確認する必要がある点を理解できたか」といった質問については、「ほぼ理解できた」が6割程度だった（質問8）。「大いに理解できた」とを合わせると8割程度の学生が理解できたとしていることは安心材料の一つといえるかもしれない。

[4] メディアリテラシーの授業形態についての考察

メディアリテラシーの授業形態は単なる講義だけの一方通行的なものでなく、学生が新聞を読んで意見をまとめたり、自分で社会的背景を考える時間を作り、レポートにまとめ教員が講評したりする双方向型の授業を意識して進めてきた。

第一に5月から7月末まで3か月間、学生宅に配達される日本経済新聞に目を通すことを授業の予習・復習とした。そして授業のある月曜日に当日の朝刊を毎回持参することを原則とした。新聞社には月に一度、新聞休刊日がある。これは毎日、早朝と夕方に配達を続ける新聞販売店への配慮などのための慣例となっており、日曜日の朝刊の配達後から翌日の夕刊の配達まで休暇をとれる週明けの月曜日がそれに充てられることが多い。新聞休刊日が授業日になる際は、前日の日曜日の朝刊を持参させることにした。

そして、授業開始後30分程度かけて、「私の今日の一押しニュース」と題して、自分が一番興味をもった新聞記事をはさみで切り抜かせて、バインダー（A4サイズ）に張り付ける作業をさせた。当初筆者は、これらの作業を宿題にさせる方法も考えたが、同じ日の同じ新聞に掲載された同じニュースでも地域により、編集作業の都合や締め切り時間の違いなどから、分量や見出しの内容などに違いがある場合があることを学生同士で認識してもらう目的があったため、授業内での作業とした⁵。

そして、この「恒例の」作業については、「おおよそうまくできた」と半数以上の学生が回答し、「うまくできた」と合わせると約8割の学生がきちんと作業に参加していたことがわかる（質問6）⁶。

双方向型の授業を行うにあたり、2018年度は比較的グループワークを多く取り入れた。1年次春 semester という入学直後の時期でもあり、入学者同士が話し合い、お互い知り合う場を提供することも授業の目的の一つと考えた。しかし、グループワークとその発表作業は、参加した学生はとても有意義に感じていたことがわかったものの（質問9-1）、メディアリテラシーの講義時間が前述した新聞切り抜き作業を合わせるとなかなか足りないことが判明したため、2019年度においては、グループワークは行わなかった⁷。

そうしたグループワークは現実問題として、いろいろな人の意見を聞き、さらにそれを自分で咀嚼し、自分なりの意見を述べ、グループとしてプレゼンテーションすること自体も、メディアリテラシーの認識を深める意味で有意義であると考え。実際、参加者は「うまく参加できた」かどうかについては、半数が「ほぼ参加できた」とし、「大いに参加できた」を加えると8割近い学生が満足していたことがわかる⁸。

しかし、翌年の2019年度はグループワークは実施しなかった。学生の側の反応としては、とくにグループワークや発表作業を取り入れることについては、4割程度が「どちらともいえない」を選んでおり、次に多い「たまに取り入れるべき」とした者も2割に達しておらず、効果的な授業方針の検討も今後の課題と思われる（質問9-2）。

【5】本学部におけるメディアリテラシー授業の必要性と課題

ーまとめにかえて

本学部におけるメディアリテラシーの授業は1年次入学直後の「導入教育」に位置付けられており、これまでの高等学校以前のような講義中心の授業形態に慣れてきた新入生たちにとり、大幅に意識改革を迫られる授業内容であるとも考えられる。自宅に3か月間、新聞が半ば強制的に配達され、それが大学の「教材」であることが同居している保護者とともに意識せざるを得ない環境に置かれると推察される。

受講者らは、授業においてもまずは授業当日の新聞を開くところからは

はじめ、作業開始とともに短時間でニュースを選択し、ニュースの内容を理解し、内容を要約する必要に迫られる。授業においては、「見出し」や「前文（リード）」といった新聞構成上、特有の用語を説明するとともに、必ずしも高校時代以前に書いてきた作文や小論文のように、「序論・本論・結論」とか「起・承・転・結」といった書き方ではなく、書き出しに近い部分にニュースの重要な要素が詰まった書き方がなされている点を説明している。さらに、作業工程の時点で、配達地域により同じ日本経済新聞であっても内容が違うことに学生は意外な表情を浮かべ、隣人と紙面を比べ合う場面が見受けられた。新聞には制作や印刷、販売店への発送、販売店からの配達という段取りがあるため、原稿執筆と編集作業に厳しい締め切り時間があり、地域により内容が違い、それを示すためにいわゆる「版」だでの数字が欄外のページ数とともに記入されていることを説明した。

こうした新聞の制作・工程に至る作業内容に加え、記者・ジャーナリズム・メディアのあり方やモラル（が欠如している場面がみられる点）のほか、本来の「権力」を監視する機能があることなど、メディアの役割も説明した。このほか、ジャーナリズムとは別に昨今では、政治家の発言の真偽などを市民レベルで確認作業をする「ファクトチェック」という活動も徐々にではあるが動き出していることも、教科書をもとに同時に解説している。

そして結局、どうしてこのような授業を入学早々に必須科目として受講義務があるのかについては15回の授業の中で、必要に応じてどの程度に説明している。インターネットをみても確かにニュースそのものは、新聞社からの配信記事を「コンテンツ」として購入し、そのまま配信・掲載されているかもしれないが、ニュースサイトを下方にスクロールしていくと、「〇〇の化粧品を使うと肌がゆで卵のように（つるつるに）なる」とか「〇〇の商品が売れて止まらない」などといった主旨のキャッチフレーズがみられるが、これは果たしてどこまで信じてよいものかを学生とともに考察し、今後の学生および社会人生活を続ける中で、「正しい」情報を見極める力、つまりは文部科学省が学習指導要領などを通じて提唱する「生きる力」を養うこ

とを学生に理解してもらおう工夫をしている⁹。

確かに、「事実」は一つではないという見方もある。自分自身がテレビディレクターである森は、その著書の中で、例えば学校の授業の様子をテレビカメラが撮影しにきたことを想定し、「カメラをどこに置くかで見えるものはまったく違う。先生の立っている場所にカメラを置く場合と、クラスの問題児の席のすぐ傍にカメラを置く場合とで、世界はまったく変わる。世界は無限に多面体だ。これが事実。現象や事件。物事にはいろんな側面がある」と述べている¹⁰。さらに森は「事実は限りない多面体であること。メディアが提示する断面は、あくまでそのひとつでしかないということ。もしも自分が現場に行ったなら、全然違う世界が現れる可能性はとても高いということ」と解説する。

それならば、メディア、あるいはメディアリテラシーとその授業は必要なのだろうか。森の論を紹介すると「メディアは水や空気のように、道路や橋のように、僕たちの生活にとってなくてはならない存在になってしまった。今さら手放せない。そして何よりも、ステレオタイプを壊してくれる可能性を持つのもメディアなのだ。人が憎み合い、傷つけ合うばかりのこの世界を、大きく変えてくれる可能性を持つのもメディアなのだ」としている。さらに「だからリテラシーは重要だ。正しくメディアを見たり聞いたり読んだりすることは、この世界について、正しく思うことと同じ意味だ。そのうえで考える。自分は何をしたいのか。世界はどうあるべきなのか。何が正しいのか。何が間違っているのか。僕たちがリテラシーを身につければ、きっとメディアも変わる。変わったメディアによって僕たちはもっと変わる。そうすればきっと、世界は今よりはいい方向に進む」と解説している。

また、中橋は、「個人が日常的なコミュニケーションツールとしてデジタルメディアを活用し情報発信ができる時代であれば、単に情報を読み解く能力としてだけでなく、表現能力やメディアのあり方を考え行動できる能力まで含めたメディア・リテラシーに焦点を当て、その育成方法を検討していくことが重要な研究課題だと言える」としている¹¹。

実際、本論文で用いてきたアンケート結果から新聞は大学における授業のテキスト、ツールとして成立するのであろうか。池上は「新聞のスポーツ記事で、世界情勢がつかめる」として、北京オリンピックでの出来事を取り上げ、新聞活用を進めている¹²。

2008年、北京オリンピックの開催時にグルジアとロシアで戦闘が始まった。オリンピックでは女子エアピストルでロシアの選手が銀メダル、グルジアの選手が銅メダルを獲得し、両者は表彰台で抱き合い、観衆からは拍手が巻き起こったという出来事があり、日本の新聞も伝えた¹³。記事によると、グルジアの選手団は五輪撤退も検討していたが、北京に残り続け、グルジアの選手は「この数日、気持ちは揺れ動いた。人が戦争を始めたのではない。政治家が始めたのです」と涙ぐんだとのことである。

前述したように、本講義の受講生の興味・関心分野は社会欄とスポーツ欄がともに3割前後と高い。単にスポーツの「結果」ではなく、世界情勢を知る「きっかけ」にもなることがこの論考からも理解できる。

最後にこのメディアリテラシーの授業についての学生の満足度の平均値は約70%であることを示したい(質問10)。調査期間の2年間の中で、前年に比べ、教科書が1冊増えたことや、グループワーク実施の有無のほか、前述した森氏の文章の一部をプリント配布したり、メディアリテラシーにつながるDVDの鑑賞の有無があったりなど、授業内容に若干の違いがあるものの、ほぼ一貫した内容であったと思われる、おおよそ学生に評価されたものと推察できる。

若い世代から中高年に至るまで新聞を読まない人が増えているのは事実である。しかし、これまで考察してきたように、筆者自身が新聞記者としての実務経験者教員であることを置いても、新聞は社会との接点として必要なメディアであると考えられえ。ただし、デジタル化が進み、「新聞紙」という紙媒体は明らかに衰退の一途をたどり、新聞文化そのものが古典化していくことは否定できないであろう。本授業においては、当面は日本経済新聞の紙媒体を学生が購読することが続けられる見通しだが、実際、本学部におい

ではノートパソコンが学生に貸与されていることもあることから、日経電子版を利用し、3か月間、学生のパソコンのIDを登録するなどして、パソコン画面上で新聞購読することも将来的な検討課題ではないかと考えられる。

学生が社会人になるにあたり、メディアと接する生活は今後もさらに続き、メディアリテラシーの重要性は一層高まるものと考えられる。授業の方針のみならず、若い大学生世代がメディアとどのように接し、メディアリテラシーの能力を高めるためにはどのような方法があるか、研究をさらに続けていきたい。

【質問と回答】

(質問1) 5月から7月までの教材だった日本経済新聞は、どの程度購読しましたか。(1つ選択)

		加重値	回答数	%
全体		(加重値)	195	100.0
1	毎日購読した	(5)	12	6.2
2	ほぼ毎日購読した	(4)	13	6.7
3	週に半分程度購読した	(3)	39	20.0
4	週に1, 2日購読した	(2)	95	48.7
5	ほとんど購読しなかった	(1)	36	18.5
平均値			2.33	
標準偏差			1.05	

(質問2) 日本経済新聞の1回の購読時間は平均して、何分程度でしたか。(1つ選択)

		加重値	回答数	%
全体		(加重値)	195	100.0
1	1時間以上	(5)	3	1.5
2	30分以上1時間以内	(4)	19	9.7
3	30分程度	(3)	55	28.2

4	10分以内	(2)	91	46.7
5	ほとんど読まない	(1)	25	12.8
	無回答		2	1.0
平均値				2.40
標準偏差				0.89

(質問3) 日々のニュースで興味をもったジャンルは何ですか。(複数選択可)

		回答数	%
全体		195	100.0
1	政治・行政	23	11.8
2	経済・経営	20	10.3
3	社会(事件や街ネタ、教育、福祉など)	65	33.3
4	国際・外交	24	12.3
5	科学・医療	16	8.2
6	文化	15	7.7
7	スポーツ	58	29.7
8	社説・コラム・読者投稿	10	5.1
9	その他	4	2.1
	無回答	2	1.0

(質問4) 8月以降も新聞を読もうと思いますか。(1つ選択)

		回答数	%
全体		(加重値)	195 100.0
1	毎日読もうと思う	(5)	12 6.2
2	時々読もうと思う	(4)	46 23.6
3	週に1, 2回読もうと思う	(3)	51 26.2
4	あまり読みたいと思わない	(2)	68 34.9
5	全く読みたいくない	(1)	18 9.2
平均値			2.83
標準偏差			1.08

(質問5) 【質問4で「2.時々読もうと思う」～「5.全く読みたくない」と回答の方】
新聞を読もうと思わない理由は何ですか。(1つ選択)

		回答数	%
全体		183	100.0
1	新聞を定期購読する予定がない	29	15.8
2	新聞を買う経済的余裕がない	23	12.6
3	ニュースに興味がない	5	2.7
4	新聞がつまらない	11	6.0
5	スマホやパソコンがあるから新聞を必要としない	89	48.6
6	その他	22	12.0
無回答		4	2.2

(質問6) 毎回の授業や宿題で行った「私にとっての一押しニュース」は、毎回きちんと選んで内容の要旨や背景、今後の見通しなどを書く作業をうまくできましたか。(1つ選択)

		加重値	回答数	%
全体		(加重値)	195	100.0
1	うまくできた	(5)	31	15.9
2	おおよそうまくできた	(4)	105	53.8
3	どちらともいえない	(3)	48	24.6
4	あまりうまくできなかった	(2)	11	5.6
5	全くうまくできなかった	(1)	0	0.0
平均値			3.80	
標準偏差			0.77	

(質問7) 授業で取り上げた「ファクトチェック」について、これまでの生活の中でインターネットなどの情報に接し、その真偽を見極めにくい場面はありましたか。(1つ選択)

		加重値	回答数	%
全体		(加重値)	195	100.0
1	よくあった	(5)	25	12.8

2	たまにあった	(4)	94	48.2
3	どちらともいえない	(3)	63	32.3
4	あまりなかった	(2)	12	6.2
5	全くなかった	(1)	1	0.5
平均値				3.67
標準偏差				0.80

(質問 8) 15 回の授業を通じて、物事や社会の出来事について、事実を確認する必要がある点を理解できましたか。(1 つ選択)

			回答数	%
全体		(加重値)	195	100.0
1	大いに理解できた	(5)	46	23.6
2	ほぼ理解できた	(4)	114	58.5
3	どちらともいえない	(3)	29	14.9
4	あまり理解できなかった	(2)	4	2.1
5	全く理解できなかった	(1)	1	0.5
無回答			1	0.5
平均値				4.03
標準偏差				0.72

(質問 9-1) 【授業年度が「1.2018 年度前期」の方】グループワークや発表作業にはうまく参加できましたか。(1 つ選択)

			回答数	%
全体		(加重値)	98	100.0
1	大いに参加できた	(5)	26	26.5
2	ほぼ参加できた	(4)	49	50.0
3	どちらともいえない	(3)	17	17.3
4	あまり参加できなかった	(2)	4	4.1
5	全く参加できなかった	(1)	1	1.0
無回答			1	1.0

平均値	3.98
標準偏差	0.84

(質問 9-2) 【授業年度が「2.2019 年度前期」の方】授業にグループワークや発表作業を取り入れた方がよいと思いますか。(1 つ選択)

		加重値	回答数	%
全体		(加重値)	97	100.0
1	ぜひ取り入れるべき	(5)	9	9.3
2	たまに取り入れるべき	(4)	18	18.6
3	どちらともいえない	(3)	40	41.2
4	あまり取り入れるべきではない	(2)	14	14.4
5	全く取り入れない方がよい	(1)	15	15.5
無回答			1	1.0
平均値			2.92	
標準偏差			1.16	

(質問 10) これまで 15 回の授業に対して、あなたの満足度は何%ですか。(数値を記入)

		回答数	%
全体		195	100.0
0	10%未満	1	0.5
10	10～20%未満	1	0.5
20	20～30%未満	4	2.1
30	30～40%未満	2	1.0
40	40～50%未満	5	2.6
50	50～60%未満	17	8.7
60	60～70%未満	37	19.0
70	70～80%未満	60	30.8
80	80～90%未満	42	21.5
90	90～100%未満	16	8.2

100	100%以上	9	4.6
	無回答	1	0.5
平均値		70.59	
標準偏差		17.30	
最小値		2.00	
最大値		120.00	

〔注〕

- ¹ 中橋雄『メディア・リテラシー論—ソーシャルメディア時代のメディア教育』(2014年4月)北樹出版 P13
- ² 一般社団法人日本新聞協会「新聞の発行部数と世帯数の推移」
<https://www.pressnet.or.jp/data/circulation/circulation01.php>
(2019年10月23日閲覧)
- ³ 筆者が担当する「メディアリテラシー」においては日本経済新聞を学習の上での必須道具とすることに加え、『ファクトチェックとは何か』(立岩陽一郎・楊井人文著・岩波書店)、『実践メディアリテラシー』(大重史朗著・揺籃社)を教科書として使用した。(前者は2018・2019年度、後者は2019年度のみ「教科書」として使用した)
- ⁴ 大学が匿名で共通のマークシートを用いて授業の満足度などを調査するものとは別に、筆者が独自に考案した設問により実施した。
- ⁵ 新聞社では報道部門だけをとりても分業制であり、取材記者と編集専門で内勤の記者(かつては整理記者と呼んでいた)がいることを授業で説明した。
- ⁶ 実際、筆者は、毎回、新聞記事を張り付け、社会的な背景や感想を記させたバインダーの1ページを毎回提出させ、内容をチェックし、翌週に確認印を押した上で返却する作業を繰り返した。切り抜きをしてもらう際は、学生に対し、必ず、記事の日付や掲載ページ数などを見出し近くに記入させ、今後、他の授業などでレポート提出の際に参考文献などを記すルールを身につけさせることも意識しながら行った。
- ⁷ 前掲(3)にあるようなテキストを2019年度は2冊用いたことも影響している。
- ⁸ グループワークや発表練習は、グループにより質や量に差があったことが今後の改善点と思われる。
- ⁹ 文部科学省「新しい学習指導要領 生きる力」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm (2019年11月1日閲覧)

- ¹⁰ 森達也『世界を信じるためのメソッド』（2006年12月）理論社 P118-147
- ¹¹ 前掲（1）P16
- ¹² 池上彰『池上彰の新聞活用術』（2010年9月）ダイヤモンド社 P222-224
- ¹³ 朝日新聞「友情には戦闘も立ち入れない ロシア・グルジア、表彰台で抱擁
北京五輪」（2008年8月11日付）P30

A consideration of university students' interest in subscribing
to newspapers
—Using the results of an independent survey in a media-literacy class
as an example—

Fumio OSHIGE